慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	構造主義の吟味：論理主義のパラダイム
Sub Title	Inquiry into structuralism
Author	高野, 守正(Takano, Morimasa)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1985
Jtitle	哲學 No.81 (1985. 12) ,p.1- 35
JaLC DOI	
Abstract	The aim of this article is to explore the paragigm of logicism in "Structuralism" from the cognitive point of view. The cognitive structure consists of, the logico-mathematical laws central to it, and universal schemata such as causality etc, and the evaluation mechanism, for example, to evaluate private experience through behaviors, and peripherally cultulal norms. The modern cognitive theory tries to deal with the cognitive issues in the aggregate, in other words, it pursues the devices to converse with the environment. Levi-Strauss learned from phonology that distinctive features are the universal form of all human minds and reduced the structure of culture into universal logical relations. For him meaning is a subsidiary of the structure. Chomsky goes on the assumption that linguistic and mental processes are virtually identical, and language is qualified as self-completed structure isolated from other cognitive competence. We cannot assign any structural description to the sentence without models for perception. Piaget regarded cognitive development as the growth toward logico-mathematical operation. He described what the child lacks of being formal operation. His logicism doesn't concern itself with abstraction, cognitive frames, but with relations among abstracts.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000081-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

構造主義の吟味

——論理主義のパラダイム——

高　野　守　正*

Inquiry into Structuralism

Morimasa Takano

The aim of this article is to explore the paragigm of logicism in "Structuralism" from the cognitive point of view.

The cognitive structure consists of, the logico-mathematical laws central to it, and universal schemata such as causality etc, and the evaluation mechanism, for example, to evaluate private experience through behaviors, and peripherally cultulal norms. The modern cognitive theory tries to deal with the cognitive issues in the aggregate, in other words, it pursues the devices to converse with the environment.

Lévi-Strauss learned from phonology that distinctive features are the universal form of all human minds and reduced the structure of culture into universal logical relations. For him meaning is a subsidiary of the structure.

Chomsky goes on the assumption that linguistic and mental processes are virtually identical, and language is qualified as self-completed structure isolated from other cognitive competence. We cannot assign any structural description to the sentence without models for perception.

Piaget regarded cognitive development as the growth toward logico-mathematical operation. He described what the child lacks of being formal operation. His logicism doesn't concern itself with abstraction, cognitive frames, but with relations among abstracts.

* 慶應義塾大学文学部非常勤講師（哲学）

I—1

まず，簡単に機能主義との対比において構造主義を見ることにしよう．機能主義の趣旨は，社会生活を織りなしている価値の体系を見極めようとすることにある．すなわち，呪術，婚姻関係，経済，労働などが組織的に規制されている様式が主題となる．

ラドクリフ＝ブランやマリノフスキーの機能主義に欠けていたものは，人間の操作的行為についての論理的分析である．マリノフスキーの挙げた公理に見られるように，彼が注目したのは現象論である．彼の理論のキーワードである制度とは，人間の操作的行為が事実的世界のなかで築きあげた結果である．機能主義はこの結晶の構造ではなく，それら多くの結晶の織りなすハーモニーを追求した．しかし，それは人間の普遍的な操作的行為のもつ構造からの解明ではなく，所与としてのハーモニーを要素間の機能的統一体として研究対象としている．ここに基本的な欠陥がある．第二に，彼は人間の要求を生物学的レベルに基礎をおいて，シンボル活動を派生的レベルとして扱っている．そこに彼の理論に社会の動態的レベルが欠落してくる一因があるように思う．第三に，マリノフスキーの科学についての認識の貧困を挙げねばならない．マリノフスキーは述べている．「すべての科学理論は，観察から出発し観察にいたらなければならぬというのが，われわれの主張であった．科学理論は帰納的でなければならず，経験によって検証できるものでなければならない．」[1] 彼は，一社会のなかに入って，予断をもたずに観察調査して，その社会の文化の全体像を構築しようとする．そしてそれを真に実行した人でもあった．しかし，上記のような視点では一般化への道は閉ざされてしまう．

レヴィ＝ストロースは機能主義の方法論を逆転させる．「民族学者の関心を惹くのは，ある機能の普遍性ということではない．そうした普遍性はまだまだ確立されるにはほど遠いし，それはこの種の一切の習慣とその

歴史的発展の注意深い研究なしには確認されないであろう．むしろ，この習慣はまことに変りやすいという事情こそ民族学者の関心を惹くものなのだ．その唯一のではないにせよ，第一の目標が相違点を分析し解釈することにある学問が，類似点しか見ようとしないことによってすべての問題を見失ってしまうことはたしかである．しかも同時にそれは，求めている一般的なものを，それが満足する平凡なものから区別するためのあらゆる手段を失ってしまうことになるのである[2)]．」「人類学は，社会生活の中に，すべての側面が有機的に結びあわされた一体系を見るのである．だがある種の現象についての認識を深めるためには，社会心理学者や法律学者や経済学者や政治科学の専門家がおこなっているように，全体を分断するのもやむをえないということも，あえて認める．そして人類学は，モデルの方法につよい関心をもっているので，分断されたそれぞれのモデルを妥当なものとして認めるのである．しかし，人類学者が，モデルを構築しようとするとき，それはつねに，社会生活のさまざまな表現に『共通の形』を発見しようというたくらみをひそかに抱いてのことである[3)]．」

このようなモデルとなる「構造」をレヴィ＝ストロースはどのように考えているのであろうか．それぞれの文化にはそれ固有の象徴体系がある．それゆえ，文化的事象はこの象徴体系によって意味が付与される．ところで，この象徴体系は人間の無意識的な精神活動に根ざしており，それは普遍的形式のものである．それが諸言語，諸制度，諸慣習に形をとって現れる．構造主義はこの無意識的な普遍的形式にかかわるものである．それゆえ，社会現象の表面に現れた経験的実在から帰納的に導かれるような性格のものではなく，それらを説明できるようなモデルを構築することである．いわば論理的構造に言及するものである．このようなモデルが満たさなければならない条件をレヴィ＝ストロースは四つ挙げている．第一には，モデルはシステムを構成していて，一つの要素の変化が他のすべての要素に影響を与えるような性格のものである．第二に，モデルの集合は一

つの変換群を形成すること．第三に，モデルの要素の一つに変化が起こったときに，モデルの振舞いについて予測可能であること．第四に，対象領域のすべての事象をモデルが包括していることである[4)]．

これは「関与性」に焦点をあてるときに浮き彫りにされる自然科学の方法である．果たしてこの方法が認知についての真の科学の方法として成立し得るかどうか，また，文化現象に適用されるときに十分な理論になり得るか検討することが本稿の目的である．その前に上記の定義について多少の敷延をしておこう．

I—2

上記の方法が適用できるような領域は文化現象全般どこでも可能というわけではない，とレヴィ＝ストロースはみている．社会生活総体を構成している現象から比較的に分離可能，つまり変数の数が少なく，それに変数還元の操作を施しうるような現象でなければならない．未開社会は閉じた社会であって，攪乱因子がきわめて少ないので，パラメータが一定と考えてよく，社会が変数だけで記述できる．それはちょうど時計仕掛けに例えることができる．また言語も同様に安定性をもつ現象である．それゆえ，構造主義は民族学とか言語学において可能になる．

個々の現象や文化の様態は，他の現象や文化との関係のなかに対置して見るときに初めて普遍的な構造が浮き彫りにされ，そこから個々の現象の特異性が明確になり，そこに潜んでいた暗号も解読されうるのである．換言すれば，人間の文化的活動を支配している潜在的だが普遍的形式が存在すると仮定することで個々の文化現象の意味機能を説明しようとする．

彼は文化的カテゴリーを構成するいくつかの要素を抽出し，類似と対比という論理的手法を用いてそこに上記のような構造を見出そうとする．そして，このような構造がいくつか構成されるならば，それらを他の社会的文化的諸現象の解読格子として用いる．

社会的事実は，私たちの外にではなく，内に，すなわち，知的秩序に属する．だから，それは法律的，経済的，宗教的，審美的，形態学的に現象することになる．要するに，全体性とは，これらすべての面の間の機能的関係網に存するというわけである．構造についてのこの考え方から次のことが帰結される．「二つの条件に応える配列のみが構造を持ったものです．一つの内的脈絡によって支配された体系であること，そして，この脈絡は，一つの切り離された体系の観察においては近づきえないものでありながら，変換の研究――それによって，一見異なった体系の中にいくつかの似た特性を見いだします――において明らかになります．……記号と象徴は，伴立と排除という内的法則によって支配されている体系に属している限りにおいてその役割を演じうるのですし，また一記号体系の本領とは変換可能なこと，言いかえてみるならば，転換によって他の一つの体系の言語で翻訳できることですから．[5]」この内的脈絡と変換可能性は，彼の大前提である人類にとっての普遍的形式の現れにすぎない．

要素の組み替え技法については，トーテミズムに関連した箇所で次のように述べている．「要素のレベルで恣意的であっても，体系は全体として見るとき一貫性をもっている．体系に取り入れられる鳥は，人間になぞらえる象徴性を与えやすい習性をもち，また相互に弁別することが容易でなければならず，しかも，その弁別に使われる特徴は，結び合わせるとさらに複雑な情報を表現できるようなものであることが必要である．そういう性質の鳥だけが選ばれるのである．……要素自体はけっして内在的に意味をもつものではない．意味は『位置によって』きまるのである．それは，一方では歴史と文化的コンテキストの，他方ではそれらの要素が参加している体系の構造の関数である．[6]」

このような変換手続きを用いることで普遍的形式を抽出し，機能主義を超えて文化人類学は科学の地位を獲得できるとレヴィ＝ストロースは考えた．

I—3

以下では，レヴィ＝ストロースの構造主義についていくつかの問題点を考察したい．まず，構造と意味の問題である．

レヴィ＝ストロースは，意味や感情は構造から派生するという．彼は，親族体系やトーテミズムに関してそれを実証した．ラドクリフ＝ブラウンなどは，婚姻規則を家庭内での法的地位や感情を社会に拡張解釈することで説明してきた．たとえば，父系社会では，父親は息子に法的権威をもち，息子は父親に尊敬と緊張の感情をもっている．一方，母親はそのような権威をもたず，息子を甘やかし温かい保護者になっている．息子はこの家庭内で培われた感情と行動型を母の兄弟の家庭に対しても延長し，その娘と親しくなる．これが婚姻への動因となる，と解していた．このような理論はレヴィ＝ストロースの構造主義の前に雲散霧消してしまった．また，トーテミズムについても同様である．レヴィ＝ストロースは，マリノフスキーの情緒や実利性による解釈を批判して，オーストラリアには笑い，病気，死骸などのトーテムもあるし，彼らにとって何が不安であったり，何を危惧していたかを示すような理論はない．個人は感ずることに応じて行動するのではなく，むしろ，内的感情を生ぜしめる以前に外的規範として与えられている．外的規範が何を恐れるか，何を親しいと感ずるか，個人の感情が現れるべき境遇を決定する．つまり，感情は原因ではなく帰結であるというのである．このように，レヴィ＝ストロースは無意識的な論理構造は意味の操作システムなのであって，それが情緒の領域に滲透し支配していると考える．

これは，まさに承服させる議論のように見える．レヴィ＝ストロースの「構造」は一つの視点から照射され浮かび出た構造である．たとえば，交換における互酬性である．ムルンギン体系には互酬性という概念は登場しない．これはアンドレ・ヴェーユの群構造[7]を見れば明らかなことである．

互酬性はこの群構造を部分構造とするより大きな構造に属する．このような視点から構造を抽出しているからこそ，復元された現実は意味を獲得するのであって，その構造自体の与える意味ではない．人類に普遍的な論理構造は完結的体系ではなく，その周辺に，普遍性についてはそれに劣るが，因果性とか互酬性などの原理が存在し，さらに生物学的制約や文化的規範へと接続している．もうひとつの例を挙げよう．レヴィ＝ストロースは料理法について例示したなかで，《焼いたもの》と《煮たもの》は，ある部族では前者が藪地の生活に，後者が定着生活に関係し，別の部族ではこの関係が逆になる．また，《煮たもの》は節約を意味し《焼いたもの》は浪費を意味しており，前者は大衆的で後者は貴族的である．この様相は，個人またはグループ間での身分上の差別を規定している諸社会では前面に出てくると述べている[8]．料理の三角形という構造を内部変換するだけで社会の生活様式や身分関係が演繹されてくるわけではない．その三角形を変換させる力はそれぞれの社会のより高次の構造であろう．

レヴィ＝ストロースは親族体系が婚姻の交換機能を果たしているように，機能は構造から産出されると考える．しかし，同じ機能を営む異なった構造もあるし，逆もありうる．また，ある機能を果たしている部分が量的に変化してくれば同じ構造では同一の機能を保持できなくなることもありうる．さらに，ある部分の構造や機能の変化が連鎖的にそれと関連する諸部分の構造に変革を強要することもある．構造を，機能や意味と結びつけているものは，まさに前述の，論理から文化まで連続体をなす認知構造なのである．そうであるからこそ精神の創造が構造の変革を生むのである．

レヴィ＝ストロースは，構造が何を記号化するかという認知の様態は棚上げしておきながら，必要に応じてこっそり裏金として使っている．野生の思考はいわゆる「器用人」の仕事であって，情報の組み替えである，とレヴィ＝ストロースは言っている．その組み替え技法についてはⅠ—2で

引用した通りである．つまり，自然条件と社会条件の間の相同関係を確立することである．しかし，ここで言われている意味の決まり方のメカニズムこそが彼の構造に欠けている点である．何が情報になりうるかはその社会，つまりそのシステム自体が決定する．それはシステムの目標，情報処理能力と相関である．システムは目標志向型であり，情報はシステムにとって有意味な入力である．それゆえ，入力はシステムの内部で意味が付与されるし，感情はシステムの状態の内部表示であると言えるから，当然，意味や感情はシステムが規定する．しかしそれは孤立した論理構造が与えるのではない．

関係には感覚的なもの，知的なもの，といろいろあるが，それらを未開人はいくつもの軸を用いて表現する．これら論理軸の数，性質，「資格」は文化によっておそらく違う．どんなに貧しい文化であっても，いくつもの次元をもった論理によって操作を行っているのであり，それらの論理の目録を作り，それらを分析，解釈するには非常に豊かな民族誌的．一般情報を必要とする．ところが現状ではそれが欠けていることが余りに多いのである[9]．このようにレヴィ＝ストロースは述べている．それゆえ，文化の構造化は困難であるから，変数を制限し，パラメータが一定である構造のみを抽出しょうとするのである．しかし，たとえパラメータが一定の社会であっても多くの論理軸をもっているということは彼の指摘する通りである．今その論理軸を I_i としよう．I_i は要素 $x_1, x_2, \cdots, x_n$ を構造化する．これを次のように表そう．

$$I_a(x_1, x_2, \cdots, x_m) \qquad x_i \in A$$

$$I_b(y_1, y_2, \cdots, y_n) \qquad y_i \in B$$

$$\vdots$$

I_i は文脈指標と考えてよい．この方程式が導関数を決定することで要素 x_k の共示義 (connotation) を表現する．さらに，x_k と y_j との間には，

$$\exists x_k \exists y_j (y_j = T(x_k))$$

という関係も成立しうるのである．たとえば，山羊は家畜として食料源でもあるし，生贄にもなる．文化とはこのような共示義が形成する世界であろう．したがって，文化現象は構造のネットワークによって解明への足がかりがえられるのである．

アンリ・ルフェーヴルが「構造は，生成がたどる行程の跡，その道に沿って推積したもの，生成が乗り越えることによって放棄した一連の作品にすぎないのだ.[10]」と言っているのは，構造主義は「体験されたもの」を捨象することによって社会的現実の規範という残滓を手にしたということである．つまり，論理主義による過度な還元の虚構というわけである．これは一面の真理を含んでいる．構造は決して残滓ではないが，レヴィ＝ストロースの構造は「体験」を生み得ないものとなっている．それは，構造主義が孤立した自己完結的構造を意図しているからであり，しかも静態的均質空間を仮定しているからである．上記 I_1 で示したような意味空間に枝葉を伸ばした構造であれば，そしてそれらのネットワークへの開いた構造であれば，思弁的水準での全体性回復に依存せずにすむであろうし，意味のダイナミズムを説明できるであろう．このとき初めてレヴィ＝ストロースの定義の第一，第三項が満足されるのである．

次にレヴィ＝ストロースの構造概念をソシュールのラングと対比して考察してみよう．ラングとは，即自的な自然の反映ではなく，カオスである世界を秩序化する体系である．連続的なものを離散化する差異の価値体系である．要素それ自体では意味をもちえないのである．レヴィ＝ストロースにとっても個々の神話や親族体系を問題にするのではなく，神話一般，親族体系一般が構造を示すのであって，そのなかに個々の神話や親族体系が位置づけられる．しかし両者の間には大きな差異がある．ソシュールにとって言語は一般的な認知の体系である．言語以前にはカオスがあるだけであって，それを言語によって切り取ることで認識が成立する．それゆえ，言語記号は表現であると同時に意味である．そのような潜在的言語能

力がランガージュであり，それが社会的に顕在化した構造がラングである．それゆえ，ラングは認知活動の社会的所産であると同時に認知の機関でもある．それであるからこそ，社会制度，慣習，規範などの間にラングが関係づけを提供しているのである．そして社会的実践を通してフィードバックされてラングの価値自体が変革するのである．これがパロールの機能である．記号は碁盤に並べられた石に例えられる．石の一つ一つにはそれに対応する意味はない．しかし，白石と白石は協応し合い，盤上のすべての白石が呼応して一つの意思を表現し図柄を描き出す．それによって一つの意味空間が現れ出る．盤上での白石と黒石のからみ合い，これがコミュニケーションである．ゲームのなかで初めて石の配置は構造を示し，意味を獲得する．ゲームぬきでは盤上の石は何の構造も示していない．レヴィ＝ストロースの構造は白石だけの配置を示しているので，石のつながり，つまり，シンタクティックスしか示していない．この点がルフェーヴルに残滓といわれる理由である．ゲームの一打一打がパロールであり，ゲームの中での白石の描く図柄が意味と機能を産出し，文化を形成していく．碁には定石（構造）もある．しかし，定石はゲームのなかで他の配置との関係で選択されるのである．数珠つなぎの石はダンゴ石と言われてダメを詰めた石で，働きのない石である．点々と置かれ，間に空隙をもつことで，ゲームの進行にも対応でき効率のよい地取りができるのである．石の意味は，模様を張りながら柔軟に対応できるこの空隙が担っている．このような意味空間のダイナミズムが意味論の領域である．ゲームにおける石の配置こそ真の構造概念でなければならない．ここにおいて，社会生活を織りなしている価値の体系を見極めようとした機能主義の美学と構造概念は接続するのである．

ラングの体系は，私たちがつねに再構築しているものである．象徴体系が精神活動の普遍的形式に根ざしているとしても，その普遍的形式は事実的世界から切り離されてそれ自体で存在するものではない．むしろ，事実

的世界で生きていく条件であろう．それゆえ，普遍的形式が現実のなかでどのように機能ししているかが重要になる．普遍的形式の構造変換は，その民族が事実的世界をどのように引き受け，世界に意味をどのように付与し，どのように意味の再構築をしようとしているかを示すものにならねばならない．そして，機能とはこの意味付与作用の様式ということができよう．

I—4

最後に，定義について具体的に考察しよう．レヴィ＝ストロースは，結局のところ，変換という操作手続きによって文化現象のシンタクティックスをつくることを意図したのである．I—1 に挙げた定義はこの視点から読まれなければならない．定義の第一項の「要素」とは変換群をなしている一つの変異体の要素のことである．第三項は，一つの要素の指定がその変異体を同定できること，第四項は，対象領域をすべて包括する変換群をつくることが意図されている．したがって，そのような変換群は何を意味しているかを問わなければならない．その点についてレヴィ＝ストロースの主張を聞くことにしよう．

レヴィ＝ストロースは，“Le Cru et le Cuit” のまえがきの中で次のように述べている．彼は神話は純粋に論理的数学的に分析されうるものであるという確信をもっていて，神話学は実用的な機能をもつ必要はないのである．「諸神話のなかに何があるかということよりも，むしろ互いに大へん異なっているようなもののなかから選ばれた諸精神，諸社会，諸文化の所産である無意識に築き上げられたものに共通な意味 (signification) を与えうるような最良のコードを定義する公理，前提の体系を解明することが問題なのである．神話自体は二次コードに基づいている（言語は第一次のコードをなしている)，本書は，多くの神話の相互翻訳を確保することが意図されている第三次コードの試案を作製することである．[11]」 つまり，神

話学はシンタクティックスなのである．その方法は次のようにして進められる．まず，任意というよりも，価値がありそうだと思えるある神話をとりあげて分析し，その神話自体かまたはそれと同じ地域住民に起源をもつ多くの神話から導出した諸系列間に同型的関係を解明する．そして各系列に対して変換群をつくる．このようにしてできたひとつの軸上の各点に，近隣の地域住民からとられた神話で，前者とアナロジーが存在する諸神話に操作を施して，その結果を垂直軸に描く．これによって最初指針的にとられた図式は単純化されたり，豊かになったり，変形されたりする．このような方法を繰り返せば，そのほかの神話も関連づけられ，ちょうど胚分子をめぐって形ができてくるように，変換群に整理された諸系列は最初の群にとりこまれ，その構造を再生産し，限定していく．このようにして多次元の構造体が生まれる．そしてその中心部がひとつの構造を露わにしてくる．しかし，その周辺部は不確実で不明瞭な乱雑がなお支配的である．

ダン・スペルペルは，置換モデルが科学の理論である以上，その正当性を経験的に示す必要があるが，変換によって生み出されるモデルがすべて親族モデルの定義と対応するわけではないとしてその反例を示し，置換モデルのわずかな部分だけが経験的に可能な体系になっていることを示した.[12)]

これはいまだ構造が未成熟か否かという問題ではない．構造がシンタクティックな規則であるならば，それについて真偽を問うことはできない．あるモデルAから他のモデルBへと変換が起こったり，モデルCが現存しない場合には，自然的･社会的条件が作用しているのであろう．変異モデルAとBが考えられるときに，それらのなかに変換によって不変な構造が見出されたとしても，なぜ他が関与的でないかという相補的構造も考えられるはずである．また，モデルAが変換されるときには，Aの要素の社会的機能に変化が起こることも考えられる．その構造力学が考察の内に入っていなければならない．そしてどのような構造の組が選択されるかは現実の

状況との相関のなかで決定される．それが文化の形態を決定するのである．レヴィ＝ストロースの理論にはそれへの道が閉鎖されている．この点が通時態について批判を招くことになる．

レヴィ＝ストロースは，構造は精神的な制約と共に自然的・社会経済的な外的制約をも同時に受けるものであるから，民族誌的研究を通して知られるものであると主張しているが，彼にとって外的制約とはすなわち不純物なのであって，金属がどのような形態をとって埋蔵されているか，地質の構成がどのようになっているかは本質的な事柄ではないのである．

レヴィ＝ストロースは，ヤーコブソンの音韻論の方法を未開社会の構造分析に入れた，ということを処々において明言している．ヤーコブソン理論の基底的源泉に二つ考えられる．すなわち，サイバネティックスとトポロジーである．彼は「言語を精神活動とコミュニケーションとの乗物である[13]．」と規定し，言語のどのレベルを扱うにしても二つの構成特性が厳密に関係的位相的定義の使用を強制しているという．すなわち，構成成分がある属性を有するか否かという有標性と無標性の対立，そして不変体と変異の不断の目的指向的相互作用である[14]．その数学的手法として「多様性の成分を，所与の群の変換に影響されない特性に注目して研究する」という1872年のF．クラインによるエルランゲン・プログラムを挙げている[15]．その結果，ソシュールのラングの認知活動体としての面が捨象され，ラングは抽象的社会的存在ではなく，通信理論におけるコードに対比されて，個人の主体の意識のなかに具体化されているものとなった．そしてパロールはメッセージに対比される．その代わりラングとパロールの協働が強調され個人間の「パロールの回路」がとりあげられる．

このようなヤーコブソン・プログラムをレヴィ＝ストロースは構造分析の原理として採用した．すなわち，私たちが話すとき，各音素を示差的な要素に分析することを可能にする音韻論的な法則については全く意識していない．さらに，言語の統語論的・形態論的な法則についても同様であ

る．音韻論は，意識的・歴史的現実としての言語の彼方に，ある客観的な現実を見出したのである．そして，集団的意識は精神の無意識的活動の本質をなすいくつかの普遍的法則の一時的様態の，個人的な思考と行動のレベルにおける表現にほかならない．このようにして，文化も言語と同じ本質をもつ現象であると考える視点を獲得する．すなわち，「それぞれの相の固有の構造に共通する特性を表現しうるような，一種の普遍的な規則（コムド）を作りあげねばなるまい．[16]」「言語と文化とは，ともに対立と相関関係によって，別の言葉でいえば，論理的諸関係によって成り立っています．[17]」しかもレヴィ＝ストロースは，無意識的な精神活動の「いくつかの普遍的法則」とはごく僅かな構造に還元できると確信しているから，あとはエルランゲン・プログラムを実行することだけが残されることになる．かくて，「婚姻の規則や親族体系を，一種の言語，すなわち個体および集団どうしのあいだに或る種のコミュニケーションを成立させるための操作の全体と考えること[18]」によって親族構造を抽出し，トーテム現象も普遍的論理形式に還元しえたのである．

コードとは人間の普遍的記号操作活動の所産であり，文化的文脈を決定するものではあるが，音韻論の構造をここまで拡張すると共示義のダイナミズムは回復されないのではないか．言語のもつ認知能力は単なる示差的特徴にあるのではなく，もっと自在な文脈的論理にある．前者は後者の必要条件にすぎぬ．

純粋数学の言表は現実について何も述べていないというが，少くとも精神の自由な活動を反映しているではないか，と述べてレヴィ＝ストロースは次のように言っている．「精神もまた一つのものなのであるから，このものの活動は，さまざまのものの本性についてわれわれに教えてくれる．すなわち，純粋な思索といえども，つまるところは宇宙の内面化なのである．それは外にあるものの構造を象徴的な形で表している．[19]」数学の論理は文脈の論理ではなくて，示差的特徴の論理である．意味の完結的体系で

ある．ここに彼の論理主義の本質がある．

定義の第三・第四項については紙数の関係で補足する程度に留めておく．

第三項の意味するところは，構造のなかの一つの辞項が変化すればそれが構造のある変異体を指定するということであろう．建物が高床式であろうと地下式であろうと，あるいは陸屋根であろうと円天井だろうと，それらは構造力学的には同じ構造の変異体にすぎない．しかし，地質，気候，用途，環境などとの関係でそのような形態が強要されたり，望ましかったり，あるいは美的であったりする．ここで前者，すなわち構造についての疑問点は，構造とは認識のひとつの秩序ではあるが，シンタクティックスのレベルですべての論理的可能性を枚挙できるのか？　現実の秩序は構造のネットワークになるだろうが，シンタクティックスのレベルで可能なあらゆる変異体を網羅できるか？　後者，すなわち文化の様態についてはさらに複雑な問題が絡んでくる．シンタクティックスは人間に普遍的な記号活動の所産であり普遍的な認知の形式である．しかし，構造のなかのある要素を変化させる力はその変異体のあらゆる面に作用しているだろう．これが文化の創造性である．それでは，文化形態の決定要因をすべて列挙できるか？　もしそれが可能なら，定義の第三項は満たされることになる．それは文化の唯一の構造が可能ということになり，人間の創造的発展を否定することになろう．

レヴィ＝ストロースは，現実は論理的な種類の秩序である[20]，と考えている．ここでの論理とは一般的な記号操作能力を指しているのではなく，シンタクティックスに結晶するような類いのものである．現実の現れ方が多様であってもすべて体系化が可能であるとする．それほどまでに人間の深層構造は豊かなものであろうか．それほどまでに環境は潜在的に確定されているものであろうか．人間は技術という記号操作能力をもっている．その技術が環境を能動的に変革する．未開社会の文化といえどもそのような

営為の所産であろう．文化の体系化を達成するためには，パラメータを極度に統制しなければならなくなる．これがダン・スペルペルの反例に現れるのである．文化のシンタクティックスは可能ではない．

第四項は文化の単一の構造化の夢である．レヴィ＝ストロースは経験的事実を理論によって説明しようとするのではない．経験的事実のなかから恣意的とも言えるような仕方で，「共通の形」を抽出する．そのうえで「共通な形」に論理的に包摂できる事実をグループ化している．そこで用いられている論理は対比に根拠をおく単純な形式であるから，構造の変換によって予測される事実には事欠かない．彼はモデルの前提もパラメータも明示してはいない．したがって，モデルの適用範囲は曖昧であるし，モデルの妥当性について云々することさえできない．これは定義の第三項に関連してくる．つまり，構造の変化を説明する原理に欠けることになる．

私たちがこよなく愛するのは私たちが生きている事実的世界での共示義のダイナミズムである．石が描く壮大な模様である．一方，私たちがこのうえなく興味をそそられるのは結晶作用そのものである．すなわち，壮大な模様を構築していく記号操作の秘密である．シンタクティックスから意味の世界へ接続していく記号操作のメカニズム，それが現代の課題である．

II—1

チョムスキーは，「生成文法は，話し手，聞き手のためのモデルではない．それはできるだけ中立的な仕方で，話し手・聞き手によって言語が実際に用いられる際の基礎を与える言語の知識を性格づけようとするものである．……この生成文法は，それ自体では，知覚モデルや発話モデルの特徴や機能を規定するものではない．[21]」と言う．すなわち，チョムスキーは，言語を認知システムから切り離してそれ独自の世界の法則を探究しようとする．それには次のような哲学的前提がある．

「動物は状況 (Zustände) の世界に生きているのであって，人間の意味での対象 (Gegenstände) の世界に生きているのではない.[22]」 人間の言語は，状況から独立に，自由な思考と自由な自己表現の道として機能しうるもので，人間に固有な生得な構造である．それゆえ，言語は他の認知能力から孤立した完結的な構造として抽出することが十分に可能であると考えるのである．母国語の話者はそれまで一度も経験したことのない文を生成する能力をもつが，この創造性は構造のもつ「変換性」に由来する．つまり，言語を形成している要素的範疇を統合している統語論的法則は，また変換機能を内蔵しており，しかも，言語という構造の内部で自己充足的な形式になっているからである．これはまさに構造主義のテーゼである．

第二に，チョムスキーは，「言語的処理と精神的処理とは実質的には同じものである．言語は，創造的想像の機能に対する手段にとどまらず，思考や感情の自由な表現に対する主要な手段を提供する.[23]」 第一の前提で人間に固有な精神構造であった言語能力が，ここでは，広く思考・感情の諸形式をも支配していることになるが，それはあくまで人間の記号処理能力を言語のレベルに限ったうえで，それが広く一般的認知機能にも滲透するとみるのである．それゆえ，記号処理能力としての言語のシンタクティックスを構成できれば，その構造が意味を分泌するという構造主義の原則を貫くことになる．

一方でチョムスキーは次のように述懐している．

(1) John strikes me as pompous.

(2) I regard John as pompous.

ある意味で，“John”の“strike”に対する関係は“John”の“regard”に対する関係と同じであり，“strike”の“me”に対する関係は，“regard”の“I”に対する関係と同じである．私たちはこの事実を表すメカニズムをもたない．したがって，表層構造と深層構造の諸概念を超えて，なにかさらにもっと抽象的な概念が存在するように思われる．この種の多

くの問題から，チョムスキーは，統語構造と意味構造との領域の境界を限定しようとする試みは全く試案的なものとなることは確かである，と述べている[24]．“strike”は日本語で表現すれば「印象を与える」，“regard”は「……と思う」というほどの意味であろう．ここで「思う」は，「考える」に対比して感覚的印象の表現に用いられるのであって，推論的判断という要素は稀薄になる．さらに，“pompous”が態度の表現であるから，(1)と(2)は心的表象のなかで相関性をもつ．

日本語では形容詞の感覚・感情語はいくつかのタイプに分けることができる（ここでは終止形に限定する）．感覚・感情語は主体の体験の表現であるから主語は原則として一人称に限られるが，この規則が厳密に適用されるものから拡張用法まである．そして他の人称に適用される場合の手段も用意されている．

（A） 私は悲しい

（B） 私は歯が痛い

（C_1） 私はこの町が懐しい．

（C_2） 私はこの子にすまない

（D） あの人はなまめかしい

（E） この辺りはとても淋しい

（F） あの人ととても気まずい

(A)は厳密に適用された形式であって，他の人称を主語にする場合はレベルを変える必要が生ずる．たとえば，「君は悲しいの？」，「彼は悲しがる」，「彼女は悲しそうだ」，「君は悲しいのだ」（B）では，主語は主体の感覚領域の一部を限定する形式である．(C_1)は，感覚・感情を引き起こす対象，(C_2)はその向かう対象，をそれぞれ主語にし，主体を主題化している．(D)は個人的感情の対象というより，むしろ属性に近い．(E)は感情の主体を個人から一般化して普遍的な感情の表現形式となる．(F)は関係的感情である．以上略述ではあるが，日本語では感覚・感情の形容詞をこのよ

うに範疇化できる．そしてその言語形式は普遍的な認知構造の反映となっている．「悲しい」が（A）の範疇に入るということは，「君は悲しい」という形式は許されず，それを対象化してから，つまり体言化の助詞「の」を伴うことで言及せざるを得ない．あるいは，「がる」や「そうだ」のように態度からの間接的表現となる．また，（C_1）は「この町は私には懐しい」と等値である．後者の表現も態度の表現へと接続している．様子や態度は直接観察の対象になるから汎人称的に用いられる点で感覚・感情語と異なる．したがって，（C）の範疇には入らない．それゆえ，「あの人は私にはずうずうしい」とは言えるが，「私はあの人がずうずううしい」とは言えないから，「私はあの人をずうずうしいと思う」という形式で感覚印象を受けた主体，あるいは判断の主体を主語に留めるか，「私には」の形で表現するか，あるいは省略して「あの人はずうずうしい」とするかである．このように認知の構造が言語形式に制約として働いており，言語はそのような経験構造を表現するための機能として働いている．

私たちは意味の世界において世界を構造化している．そして，そこには普遍的な認知の構造が支配している．その限りでのみ，私たちは自己の意味の世界とともに，他人の意味の世界をも構築でき，これがコミュニケーションの基礎となっている．すなわち，人間の意味の世界は状況に反応するだけの構造ではないが，少くとも普遍的な認知の構造を核にしているからである．私たちは自然と対話（実験）することで自然を構造的に捉えようとすると同じように，他人の意味の世界を仮定することができ，それを基礎にして他人と対話をすることでそのモデルを再構築して，私たちが同じものについて語ることを可能にしている．

チョムスキーやカッツは，一般的認知とは切り離して文法理論の内部に意味部門という形式的理論を構築している．しかし，彼らの扱っている意味論的諸特性でさえも，言語の内部で完全に定義できるとも思えない．意味論の完結的体系などはほとんど不可能であって，文脈依存とならざるを

得ない．しかし，そこでの意味標識の構成には何らかの普遍的な認知の図式が働いていると考えられる．世界を構造化する，すなわち，状況を記号的に構成する能力の核には，I—3 でも触れたように，上記のような人類に普遍的な認知の構造があり，それをとりまいてよりゆるやかな文化的形式となって現れる連続的な構造がある．

言語はこのような認知体系が反映された記号活動の形式である．それゆえ，言語の本質は文の構造にあるのではなく，ディスクールにある．なぜなら，認知活動のなかにその真の姿を現すのであるから．次に，その辺の構造を考えてみよう．

II—2

次のような物語があったとしよう．

(1) ハンスがどうして川に落ちたのか，誰にも分からなかった．

(2) 昼間になってから，彼は発見され，家へ運ばれた．

(3) 驚愕した父は，泣きもせず，口をきかなくなってしまった子どものほうを見た．

(4) 埋葬には大勢の会葬者が集まった．

(5) 父親と，ばあやのアンナと，フライク親方は墓のそばに残った．

(6) 「まったく，おつらいことで．ギーベンラートさん」と，彼は同情して言った．

(7) 「どうもわけが分かりません，」とヨーゼフはためいきをついた．

第一文は，「か」が疑問の副助詞であり，「分からなかった」内容が前半に示されていることで明らかになる．第六文ではもっと認知の構造に深入りする．「つらい」は前節の形容詞の範疇（C_1）に属する．すなわち，「AにBがつらい」の形式をとり，Bは原因を，そしてAは「苦しみ」の心情を抱いていることを示す．一方，「同情する」という動詞は「CはDに同情する」の形をとり，Dが「苦しみ」の心情を抱いていて，それにC

が共感する，という構造を示している．ここでA＝Dがえられる．このような基本的言語構造が二つの文を接続している．第三文はさらに異なった構造を示している．まず，辞書によって次のような解釈が得られる．「驚愕する」は，意外な出来事がもたらす心の状態の表現であること．「泣く」は，人が身体的または心の苦痛のあまり，あるいは喜びのあまり涙を流すこと．「口をきかなくなってしまった」は，ものを言わなくなってしまったこと」．さらに，「泣きもせず」の「も」が「涙を流す原因があるにもかかわらず，涙を流さなかった」との解釈をとらせるとしよう．さて，父親の心理状態を表現する二つの句「驚愕した」，「泣きもせず」の解釈をするにあたって，前者の原因である「意外な出来事」は後者の原因である「苦痛」あるいは「喜び」のどちらとも矛盾しない．このような心理状態で父親は子どもを「見た」のである．「見る」は視覚的認知判断であるが，その対象と父親の心理状態の原因とは直接に結びつかない．「口をきかなくなってしまった」相手が父親であるのか他の特定の人であるのか，あるいはまた生理的現象であるのか明記されていない．したがって，辞書のレベルではこの判定基準が与えられない．「驚愕する」，「口をきかなくなる」という出来事は「見た」よりも以前に生起したことであり，「泣きもせず」は同時的出来事であることを知るのは統語論的情報である．因果関係は普遍的認知の図式である．そして，「泣く」にも「口をきかなくなる」にも原因が存在することを具体的に示すのは心理学的仮定である．そしてこれら三つの原因の間の相互関係については言語理論の埒外である．いかなる言語表現といえども，その部分構造と世界が一対一の対応にあるわけでもないし，言語表現と世界とが相同関係にあるわけでもない．それにもかかわらず，言語表現が世界を構造化できるのは，前述の，論理的普遍的形式から文化形式まで連続体をなす認知構造のゆえである．そして，それによって構造化された世界は，いくつかの標識によって囲まれた空間である．これがエーコの言う共示義の世界である．すなわち，この操作が上記第三文

に潜在的に存在する三つの原因を整合的に結びつけて一貫した解釈を与えるのである（操作そのものは論理的形式であるが，存在量化をするのは因果性や心理学的法則である）．

エーコは，表現とは指示作用ではなく文化的内容を伝えるものである，と考える．それゆえ，文化的枠組みのなかで記号の生成規則を決めているのがコードである．このような視点から，エーコは辞書による意味へのアプローチは不可能であって百科事典的知識によらなければならないとする．辞書の支持者には，言語表現の意味は有限個の意味論的基本語彙によって表わされうるという考えがあるが，それら基本語彙はいかにして決定できるか？ それが有限であることをどのようにして保証できるのか？ という疑問点を提出している[45]．また，カッツの「識別素というのは純粋に表示義的な区別を示すもの（ここでは「表示義的」というのは外延的という意味で用いられている）であり，〔それは〕概念的に同一の意味を有する指示物間の純粋に知覚的な区別を表わす．……」という主張を引用して，「意味標識というのは別の語のことでもまた純粋に抽象的な理論構成物でもなくて，実は解釈項なのであり，その結果，/アカ/ や /桜ン坊/ のような語の意味表記の枝分かれ図には，そのどこかの枝に感覚の対象となるもののイメジを含まざるを得ないということははっきり断っておかなくてはならない．このような前提をするからといって，コードの理論の理論的な純粋さを損なうわけではない．なぜなら，感覚の対象となるものとしての《赤》ですら意味的には文化的単位として規定されるからである[26]．」

このようにして，言語の辞項を正しく文脈的に位置づけるためには百科事典的知識が要求される．しかし，統一的な知識体系を確立することは不可能であるから，百科事典は局所的表示とならざるを得ない．それは文脈的そして状況的選択を指示するものである．ここで一般的な認知の枠組みがその一助として用いられる．百科事典は，つまるところ文脈，状況を構成するための規制的仮説ということになる．そして「グローバルに記述す

ることができない構造は，“局所的”記述の潜在的総和としてのみ記述されうる[27]」.

第三文を孤立した文として見てさえも辞書的解釈では十全な理解がえられないことを知ったが，それをテキストのなかのひとつの文として位置づける試みをしてみよう.

第三文で「泣きもせず」が含意するものについて何も教えてくれないであろう.「子ども」がハンスで，「父」がハンスの父と仮定してみたところで，「驚愕した」，「泣きもせず」，「口をきかなくなってしまった」からハンスの死を論理的に結論することはできない．とすれば，「埋葬」とは一体誰の埋葬なのか，「墓」は誰の墓なのか．この種の疑問は単一の文について生ずるのではなく，テキストのなかで初めて生じてくる.

「川に落ちる」の主体が人間の場合に「落ちる」は，「自分の意志ではなく，上から下へ位置を移動する」ことであるから，字義通りに解すると，原因として自殺の線は出てこない．むしろ，事故か他人の力によって落とされたのである．しかし，「どうして」という句は原因不明の意味を示すから，自殺の線は捨てられない．つまり，原因の分肢のいずれをも消去できない．そこで，人間が「川に落ちる」という出来事の簡単なフレーム[28]を考えてみよう．原因には，事故と故意，後者はさらに自殺（自殺未遂）と他殺（殺人未遂）．経過には，1．遭索，遺体発見，収容，葬儀，埋葬．2．誰かに救助される，人工呼吸，病院に運ばれる，回復（あるいは死亡），退院（葬儀，埋葬）が挙げられる．経過1は事故発生からある時間の経過を前提し，経過2は事件発生直後の行動パターンを示している（もちろんフレイムはステレオタイプの記述であることに留意しておこう）.

さて，第二文の「昼間になってから」に現れる「なる」は「変化」を示し，「に」は変化の結果，「昼間」はその結果でしかも「時」の分類上「夜間」と対立概念であるから，この句は「夜間」から「昼間」に変化して後であることを表す．これから，第二文に述べられている内容は，「川に落

ち」てから，かなりの時間が経過してからの出来事であることを示している．それゆえ，経過1が適用されて，遺体発見，収容が第二文によって満たされることになる．以上の操作で「ハンスは川に落ちて死んだ」と要約されることになる．そしてさらに第四文の「埋葬」へと連結される．このようにして，ハンスの死が措定されるなら，「肉親の死」のフレームは同じようにして第三文にその値を見出すだろう．

突然の死を知らされた者は誰でも驚愕する．死んだ者は口を聞かない．しかし，この逆は必ずしも真ではない．それゆえ，「驚愕した父」や「口をきかなくなってしまった子ども」から「子どもの突然の死」を演繹することはできない．この例に見るように，テキストの言語表現だけからテキストの意味を論理的に構成することはできない．これまで述べてきたように，テキストの理解は，それが暗黙裡に示唆している一般的認知構図を仮定して，言語構造（統語論，意味論）の与える意味と整合的な情報を演繹して，言語表現の意味を通していくのである．

物語の理解は以上の操作に尽きるものではない．今，読者の認知システムの状態を C_i，その時の入力情報を I_i としよう．C_i が I_i を受けとると，I_i の意味を確定し，I_i が C_i にとってどのような情報になるかを推論し，環境を意味づけし，認知主体の内部状態をそれに適応させ将来の環境への予測と適応態勢を整える．このようにして C_i は C_{i+1} へと変化する．この $\{C_i\}$ のダイナミズムを上記物語によって大略描いてみよう．

まず，第一文を読んで，この物語の主題（通常複数個）を措定し，仮定的推論によって主題を次々に展開する過程で，フレームを利用しながら，仮定を確認したり，補完したり，矛盾に遭遇して仮定を変更したり疑問点として棚上げしたり，筋を通すために明記されていないことを想定したり，イメージによって物語を潤色したり推論を誘導したり，物語の要約をしたり，種々の操作をしている（ここではイメージの役割については省略する）．

第一文を読むと，疑問点として，(1)「どうして」が方法なのか理由なのか不分明である．(2)「誰にも」の議論領域も不明瞭である．想定事項は「ハンス」を男名とすることである．物語の主題は (1) ハンス，(2) ハンスが川に落ちた理由または方法，(3) ハンスが川に落ちた事件，(4) ハンスが属している共同体などがぼんやり浮かび上がる．これらは第一文の情報のほんの一部である．

第二・第三文はすでに述べたので省略する．第三文までで，第一文での疑問点 (1) は解消し，想定事項は保持され，父親は息子の死を嘆き苦しんでいることが理解できた．そして主題は「ハンスの死の原因」にしぼられる．そして，第四文の「埋葬」がハンスの埋葬であることを仮説的に演繹する．「会葬者」を村人たちと想定すれば，これは第一文での疑問点 (2) を想定事項に操り込める．

第五文では「埋葬」というフレームが第四文から引き継がれる．「墓のそばに残った」人たちがハンスと関係が深かった人たちであることを示している．それを利用すれば，「ばあや」はハンスの家の老女であり，「フライク親方」とはハンスの親方であると想定できる．

第六文では「ギーベンラートさん」とは誰なのか疑問である．そこで既述のような推論がなされ，第三文で父親が息子の死で苦しんでいることが分かったので，「おつらいことで」は父親に言われていることであると結論できる．すなわち，「彼」が父親に同情しているのである．第五文から「アンナ」は老女，「父親」が男，そして残りはフライク親方であるから，「彼」とはフライク親方であると結論される．「彼」の発言内容から，父親は「ギーベンラートさん」であり，しかも敬称で呼ばれているので父親の家族名は「ギーベンラート」である．したがって，息子は「ハンス・ギーベンラート」になる．

第七文の「わけ」は，(1) 意味，(2) 道理，(3) 事情，(4) 理由という標識のうち第四項が第一文の「どうして」につながる．そして第三文の驚

愕した父」，第六文の「おつらい」と一貫して息子の突然の死，しかも原因不明の死に嘆き悲しむ父親像が「ためいきをついた」当人を推測させる．つまり，「ヨーゼフ」とは父親の名である．

以上の推論から，この物語を「ハンスは謎の死を遂げた」と要約することができよう．この物語を一貫して流れている主題はこの謎である．父親が心の中で問い続けた疑問である．では，この要約のメカニズムはどのような構造になっているのであろうか．物語文に現れている語の処理からは決してこのような情報の圧縮は可能でない．それを可能にしているのは $\{C_i\}$ のダイナミズムである．それが第一，第三，第七文を主軸に「どうにも納得できないわが子の死を嘆いている父親像」を築いてきたからである．

読者が当然所有すると考えられる知識は物語の中に明記されていない．それらは情報にならないからである．そこで読者は仮定的推論に頼らなければ，孤立文の解釈も，句と句の関連も，代名詞の同定も，多義語の解釈さえもできない．これまで述べてきた推論は論理・数学的法則による仮説演繹であった．しかしそれを支えてきたものは，因果関係のような普遍的な認知の枠組みや，「父」と「子」のような論理的関係から，「死」とはどのような現実なのか，それを人々はどのように受けとめているのか，などの人間にとってかなり普遍的な形式を経て，「埋葬」のような文化的行事に至るまで一般的知識構造であった．したがって，言語表現の理解にはこ逆の補完作業が必要となる．すなわち，純粋に論理的推論では何らの補足前提なしに一義的意味を演繹できるが，それから少しずれれば誰もが承認できるような普遍的な内容の補足前提を必要とし，さらに周辺部に移るにつれて，それに比例してより多くの仮定を要し意味の柔軟性が生じてくる．認知構造のこの連続性が言語能力のシンタクティックスを限界づけている．

III—1

ピアジェは主体を活動体として捉え，行動は何らかの《構造》の存在を前提していると考える．なぜなら，構造によってのみ行動が理解されうるからである．構造は「神経と意識的行動そのものの中間」に位置づけられる．というのも，彼にとっては，構造は生得なのではく，機能が生得なのである．知能とはひとつの適応なのであって，環境との均衡化を通して世界を構造化していくことをその機能としている．個人の知能が認識機能の均衡の形式ならば，社会集団の知性も「あらゆる共同的操作に介入されてくる操作の全体によって均衡化された《社会的》なもの[29]」ということになる．だから，均衡化は人間の理性的活動のすべてにとって十分条件となる．

適応とは均衡化のメカニズムを外的側面から見たもので，内的側面から見れば自らの体制化である．すなわち操作能力である．操作の萌芽的形態はすでに感覚運動期にも観察され，順序関係，分類，対応づけ，などの構造的要素が現れている．それがやがて具体的・知覚的な状況下でのみ体制化が可能となる具体的操作能力が形成され（その構造は群性体として定式化される），次いで抽象的な世界での操作が獲得される形式的操作期に至って構造化は完成する．

ピアジェは，このような構造一般の基本的な性格として全体性，変換性，自己制御を挙げている．全体性とは構造が合成の法則によって内的統合性を獲得するということである．そして，この全体は構造化すると同時に構造化されるという二重性格をもっている．そのために構造は変換体系になっていなければならない．構造固有の変換は，「つねに構造に属し，かつその法則を保存する要素だけを生じさせる」，このことを自己制御性という．それによって境界の安定性を伴う保存が得られる．ピアジェはここで重要な注意を喚起している．この構造の閉鎖性とは，構造がより大き

な構造の下部構造として含まれる可能性を排除することを意味するものではなく，下部構造の法則をそのまま保ちながら他の構造と連結するのである．

それでは，このような構造はどこに見出されるのか？ 構造は「事実」の領域には属さない．「物理学における因果性と同じく，社会的構造は演繹的に再構成されるべきものであり，与件として認知されるものではなく」，「可能なものの体系の中で実在を位置づけるわたしたちの操作構造に対応している．[30] つまり，ピアジェにとって，構造とは記号操作の機能的構造としての論理・数学的構造なのである．

レヴィ＝ストロース，チョムスキーと対比するために，両者に対するピアジェの批判を付記しておこう．チョムスキーは，内的均衡過程が遺伝と同じように必然的な結果に達することを見落としている．「自己調整は構造と両立しうるひとつの方向を強制するものであり，かくてこの構成は，方向づけられているというまさにその意味で必然的なものになるのである．[31]」 言語は発育二年目に現れる．言語の習得以前に感覚運動的知能が前もって形成されていなければならない．そして，この知能は均衡化過程が築き上げたものなのであって，決して構造自体が生得なのではない．

ピアジェはレヴィ＝ストロースを「人間性の永遠に対する信仰の体現ともいえる人物」[32]と評し，その特性が具体的社会組織の反映ではあり得ないような知識活動が存在するとして，潜在的・無意識的な永遠の人間精神の反映ともいえる構造を考えている．そこから共時的な見方が生まれてくる．

このような批判はピアジェの均衡化理論の帰結である．社会学，人類学だけでなく，生物学，心理学などをも含めた全体的な学を考えるとき，構造主義は機能的操作体系の上に構築されるのが最も適切であろう，とピアジェは主張する．

III—2

感覚運動的シェマとは，ある知覚が一定の行動を行き起こす，というような感覚運動的パターンである．乳首の触覚が吸啜運動を誘発するような反射シェマから徐々に発達する．生後8～9カ月頃になると，既知の独立した二つのシェマを意図的に協応させて目的－手段という関係のなかにシェマを組み込むことができるようになる．「これまでは，ある現象の原因は自分がその現象に作用しているのだという実感と一体に捉えられていたのだが，いまや主体は，原因と結果のあいだは空間的接触があること，だから自己身体だけでなく）どの対象でも活動の源となりうることを発見しはじめる．その結果，時間系列もまた，行為の継起だけに従うのでなく，出来事の継起に従って整序されはじめる．[33]」

このことは，シェマが分解され再編成可能になっていることを意味する．これをピアジェは，シェマが《可動的》になるという．シェマが可動的になってはじめて類的シェマが誕生する．このレベルのシェマの体系は，言語的ないし反省的知能における概念や判断に比せられるような機能をもつといえるが，構造的には次の点で異なっている．「第一に，感覚運動的シェマは《反省》されることがなく，物そのものに投影される．つまり，子どもは知能の操作を意識せずに，自分自身の活動の結果であるものをたんに事実がそうなっているのだとみなす．これに伴って第二に，シェマ間の含意関係を規制すべき内的規範の体系はいまだまったく存在しない．この時期の子どもにできるのは，ただ成功・失敗による吟味のみであって，真偽による吟味ではないのである．……感覚運動的知能の用いる最初の分化した関係は，《客観性》をもたず，自己に中心化されており，自分自身の視点に完全に支配されている．[34]」（波線は引用者）

まず，ピアジェにとって認知的発達はどのような構造の変化に基づくのかを考えてみよう．これまで述べてきたことから明らかなように，認知的

発達の測度はシェマの可動性に求めることができる．換言すれば，意識化の程度ともいえる．シェマは反復される行動のパターンであると同時に理解の枠組みでもある．その後，シェマが可動的になって，シェマ間の相互協応により一般化が起こってくる．たとえば，吸啜シェマは視覚と握ることが協応して，見るものすべてを握って口に入れるようなる．このようにして視覚の対象は「吸う物」という意味を担うようになる．さらに可動性が進行すれば，行動に随伴することをやめ表象的となる．これは経験された個別的原型にもとずく認識段階から具体的状況という制約のもとでではあるが可逆性を獲得し，さらにその状況からも自由になるときに初めて概念的思考に達する．

ピアジェはこの可動性の発達過程を意識化の過程としても表現している．可逆性が獲得される以前の段階を無意識性によって特徴づけ，それゆえ，現実との照応が存在しない．他者の視点を意識するようになって初めて可逆的に処理することができるようになり，完全に自己の思考を意識化できるようになるときに操作的になるのである．だから，ピアジェは「言語は意識化の標識である」と言う．

これで分かるように，ピアジェは，子どもの認知能力の発達をシェマや記号の論理的処理機構，つまり，構造の発達として捉えている．そして変換とはシェマや記号の操作について言われている．構造の要素は変換の対象という視点からしか見られていない．つまり，認知の単位となるものは何か，世界を抽象化する構造は重要性をもたないのである．

均衡化理論はピアジェの中心的概念である．同化とは対象をパターンにとり込むことであって，いわば世界の意味づけである．さらに，外的刺激は同化サイクルを修正することを強要する．これが調節である．それゆえ，適応とは同化と調節との均衡として定義される．認知の発達は均衡化された構造の論理的形式において捉えられる．ここでも同化あるいは調節の優越あるいは不安定な均衡によって子どもの構造の特質を説明し，操作

のシステムがあるときにのみ恒常的均衡がえられるという．

ピアジェは「操作」という概念を特殊に用いる．すでに獲得されたシェマが完全に可動的になって，それらの変換が自由にできることを操作的という概念で捉えている．したがってシェマが操作的になるためには，それが可逆的になっていなければならない．そして，知覚状況の制約からも完全に自由な段階に達したとき認知構造も恒常的均衡に達する．それゆえ，操作とは，記号処理一般というよりも論理的形式的処理機構を指している．

「論理学は操作的構造の公理であり，思考の心理学と社会学はそれらの現実の機能を研究するのである．」[35] これがピアジェの基本テーゼである．論理・数学的な処理は世界についてのあらゆる質的な側面を捨象する．現実からの抽象とか，それをどういう形式で表現するかに主題があるのではなくて，抽象体の間の関係が主題になる．

2才7カ月のとき，ジャクリーヌは新しい海水着をつけた妹を見て，妹と同定することを拒み，「赤ん坊の名前は？」と尋ねた．妹が再びもとのドレスを着ると「またルシァーヌになった」と叫んだ．[36] この現象をピアジェは，クラス概念，同一性操作の欠如という論理的操作の視点から説明している．これが上記の例証である．実体が変化したとシャクリーヌが考えていたのか，それとも，知覚的状況に対する名称を尋ねていたのかは別にしても，この年代の子どものことばがつねにその子の特定の経験に根を下ろしそこで意味操作をしているのであれば，そのレベルで彼らの経験する世界が構成されるはずである．つまり，彼らの認知の単位と言語の構造がそこに反映されている．論理的操作という視点からの否定的規定だけでは子どもの認知構造は捉えられない．デカラージュという現象もこの視点からの把握の欠陥を露呈している．[37]

意味とは世界の整序である．意味の世界が子どもの現実の世界であり，行動の世界であり，自らの行動やコミュニケーションによって同化と再調

整を通じて意味の世界が体制化されていくのである．ピアジェはこのダイナミズムそのものの構造を解明するというよりも，操作的＝論理・数学的視点から子どもの意味の世界を眺めるので，子どもにとって何が見えていないかが映ってしまった．感覚運動期は「操作」の萌芽期で，次の前操作期は混同的心性に支配される前論理的段階と規定される．なお，この時期の子どもは知覚的指標や運動信号にのみ働いているので，記号の使用に伴う社会性に欠けている．ピアジェの論理主義的視点と整合的にこの発達段階の必然性を特色づける原理が精神分析学にあった．つまり，前操作期の自己中心性を自閉的思考と現実的思考の過渡的形式として構造的に把握することである．自己中心的言語についての指摘，そして，ピアジェが子どもの混同的心性に関してレヴィ＝ブリュルと同じ過ちを犯すことになった，というヴイゴッキーの指摘も[38]，ピアジェが子どもに何が欠けているかを問うていたからである．子どもが自ら実践的に検証できるような範囲の事柄については混同的な解答はしないのである．

子どもが冷厳な現実と格闘しながら，いかに経験を組織化しているか，認知の単位は何か，何を構造化しうるか，その認知形式がどのように形成されてゆくのか，この点がピアジェの論理主義によっては捉えられずに残った．それが「言語は，論理操作の構成の必要条件だ」として，言語使用に現れる認知構造の探究を二次的なものに追いやったのである．

レヴィ＝ストロース，チョムスキー，ピアジェ，三者それぞれ異なる領域を対象にしながらいずれも論理主義のパラダイムを発展させてきた．このパラダイムが不妊だったというのではない．それどころか不滅の偉大な業績をあげてきた．しかし，現在，私たちは新しいパラダイムを模索している．本稿は構造主義を検討することで，論理主義のパラダイムに対する相補概念を探ってきたのである．

注

1) 〔2〕p. 71
2) 〔5〕p. 18
3) 〔5〕p. 406
4) 〔5〕pp. 303～304
5) 〔6〕p. 201
6) 〔7〕pp. 65～66
7) 〔8〕pp. 393～402
8) 〔11〕レヴィ＝ストロース著　料理の三角形
9) 〔7〕p. 75
10) 〔12〕p. 71
11) 〔10〕p. 20
12) 〔16〕pp. 220～225
13) 〔14〕p. 53
14) 〔14〕pp. 57～58
15) 〔14〕p. 54
16) 〔5〕p. 69
17) 〔5〕p. 76
18) 〔5〕p. 67
19) 〔7〕p. 299 の注
20) 〔7〕p. 112
21) 〔19〕p. 9
22) 〔20〕p, 18
23) 〔20〕p. 31
24) 〔19〕pp. 162～163
25) 〔22〕pp. 59～60
26〕〔21〕上 pp. 166～169
27〕〔22〕p. 182
28) M. Minsky は，記憶に蓄えられている標準的状況についての構造を frame と呼んだ．これはステレオタイプの記述であるから，もし frame を構成する項目について何か新しい情報が入れば，それによってその項目を置換する．もしなければそのまま frame として措定し続ける．ただし，その際は無矛盾性の吟味の対象からは除外する．このようなアプローチは KRL モデル，あるいは Schank などの script にみられる．参考文献〔23〕～〔26〕，および

〔33〕の §11 を参照されたい.

29) 〔28〕p. 117

30) 〔28〕p, 102, p. 50

31) 〔28〕p. 94

32) 〔28〕p. 109

33) 〔29〕p. 223

34) 〔29〕p. 252

35) 〔27〕p. 16

36) 〔30〕観察 106 (a)

37) 〔33〕p. 79 を参照されたい. なお,〔33〕の第二章はチョムスキーとピアジェの理論について述べてある.

38) 〔31〕

参考文献

〔1〕 マリノフスキー著 寺田・増田訳 西太平洋の遠洋航海者 世界の名著 59 中央公論社 昭 42

〔2〕 B. マリノフスキー著 姫岡・上子訳 文化の科学的理論 岩波書店 1958

〔3〕 ラドクリフ=ブラウン著 青柳まちこ訳 未開社会における構造と機能 新泉社 1981

〔4〕 レギ・ブリュル著 山田吉彦訳 未開社会の思惟 小山書店 昭 10

〔5〕 クロード・レヴィ=ストロース著 荒川他訳 構造人類学 みすず書房 1982

〔6〕 クロード・レヴィ=ストロース著 仲沢紀雄訳 今日のトーテミズム みすず書房 1980

〔7〕 クロード・レヴィ=ストロース著 大橋保夫訳 野生の思考 みすず書房 1984

〔8〕 レヴィ=ストロース著 馬渕・田島監訳 親族の基本構造 番町書房 昭52

〔9〕 レヴィ=ストロース著 大橋保夫編 構造・神話・労働 みすず書房 1979

〔10〕 Claude Lévi-Strauss; Le cru et le Cuit, Plon 1964

〔11〕 パンゴー他著 伊藤晃ほか訳 レヴィ=ストロースの世界 みすず書房 昭 43

〔12〕 アンリ・ルフェーヴル著 西川・中原訳 構造主義をこえて 福村出版 1977

〔13〕 アンリ・ルフェーヴル著 広田昌義訳 言語と社会 せりか書房 1971

〔14〕 ヤーコブソン選集 2 服部四郎編 言語と言語科学 大修館書店 1978

〔15〕 R. ヤーコブソン著 川本茂雄監訳 一般言語学 みすず書房 1983

〔16〕 ダン・スペルペル著 伊藤 晃訳 人類学における構造主義 筑摩書房「構造主義」に収録 1978

〔17〕 ソシュール著　小林英夫訳　一般言語学講義　岩波書店　1972
〔18〕 丸山圭三郎著　ソシュールの思想　岩波書店　1984
〔19〕 Noam Chomsky: Aspects of the Theory of Syntax. The M.I.T. Press 1965
〔20〕 Noam Chmsky: Cartesian Linguistics Harper & Raw 1966
〔21〕 U. エーコ著　池上嘉彦訳　記号論 I, II　岩波現代選書　1980
〔22〕 Umberto Eco: Semiotics and the Philosophy of Language. Macmillan Press 1984
〔23〕 D.G.. Bobrow and T. Winograd: An Overview of KRL, a knowledge representation language *cognitive science* Vol. 1 (1977) pp. 3～46.
(24) M. Just & P. Carpenter eds. Cognitive Processes in Comprehension, Hillsdale, N.J. Lawrence Erlbaum Associates 1977
〔25〕 Roger C, Schank and Robert P. Abelson: Scripts, Plans, Goals and Understanding, Lawrence Erlbaum Associates 1977
〔26〕 D. Metzing ed. Frame Conceptions and Text Understanding Walter de Gruyter 1980
〔27〕 J. Piaget: Traité de Logique, Libraire Almand Colin, 1949
〔28〕 ジャン・ピアジェ著　滝沢・佐々木訳　構造主義　文庫クセジュ　白水社　1970
〔29〕 J. ピアジェ著　谷村・浜田訳　知能の誕生　ミネルヴァ書房　昭54
〔30〕 J. ピアジェ著　大伴　茂訳　表象の心理学　黎明書房　昭58
〔31〕 ヴィゴッキー著　柴田義松訳　思考と言語　上下　明治図書　1980
〔32〕 Muriel Seltman, Peter Seltman: Piaget's Logic, George Allen & Unwin, 1985
〔33〕 拙著　認知の構造　慶應通信　1984